
 報 文

箸の持ち方の決定要因—中学生について

坂 田 由紀子

 The Decisive Factor in Using Chopsticks
 —In the Case of Junior High school Boys and Girls—

Yukiko Sakata

1. はじめに

前報において¹⁾、著者は京都市内の女子大生235名の箸の持ち方について、作法に示される持ち方(伝統的持ち方—S1型)と、それ以外の持ち方(S2型)に分類し、機能的にはS1型が優れており、S1型は繰り返し両親から教育された者に多い結果を得た。

しかし、現在は、家庭の教育が期待できなくなっていく風潮であり、学校が家庭教育の肩がわりをせざるを得なくなっている。一方学校給食でも正しい食習慣の形成を目的として指導が行われており^{2,3)}、やがてその効果が期待し得るのではないかと結んでいる。

今回著者は、中学生を対象とし、箸の持ち方とその決定要因について検討した。中学生を対象としたのは、米飯給食で育った世代であり、その教育効果を期待できること、中学生は自己、生活習慣等が未確立の世代^{4,5)}で、箸の持ち方も加令と共に確立されるとする橋本らの報告⁶⁾より、移行の時期として意義のあること、橋本らの調査時期から10年以上経過していること、箸の持ち方に関する報告は、中学生を対象にした報告が少ないことである。

今回は、大学生(自己確立がほぼ出来上がっている)を対照として⁷⁾検討した。

2. 研究方法

1) 超棧数および調査対象

調査は1988年(昭和63年)7月～12月、1990年(平成2年)5月～12月に行った。

対象は京都市内の中学生、女子199名、男子161名、計360名、大学生女子18～21才300名、男子18～25才255名の計555名で、調査人数の総計は915名で、それぞれの平均年齢は、中学生は男女共13.1才、大学生女子20.5才、男子23.5才であった。

中学生は、私立の高等学校まで一貫教育の女子校1校、男子校2校、男女教学校1校の計4校の精とで、通学圏は京都市内・府下、奈良県、兵庫県、滋賀県、大阪府の近郊である。

大学生は、女子は私立の短期大学および女子大学の学生で、専攻は、文系(文学部)164名—54.6%、理系(家政学部)136名—45.4%で、名古屋以西、近畿、中国、九州、四国地方出身の者が多い。

男子は、学部、大学院の国立、公立、私立の全国型の4大学の学生で文系(法学、経済、教育、文学)94名—36.9%と理系(工学、農学、医学、理学、薬学)161名—63.1%である。

3. 調査方法

調査は、中学生については、生徒の登下校時、休憩時間に校門付近、校庭等で調査者が個別に調査依頼し、大学生は休憩、昼食、放課後に学生食堂の出口付近、もしくは研究室で無差別に調査依頼した。調査方法はいずれも対面式個別聞き取りによった。

調査の内容は、箸の持ち方の分類と箸による作業

*京都女子大学家政部食物栄養学科衛生学第二研究室
京都市東山区今熊野北日吉町35
Department of Food and Nutrition, Kyoto Women's University

量の測定および15項目に渉る箸の持ち方と、受けた教育に関するアンケート調査である。

a) 箸の持ち方の分類及び機能性の測定

前報と同様に箸の持ち方の分類は、調査者が判定

し、伝統型を S1, それ以外の型を S2 とした。機能性の測定も前報と同様に行った。測定材料は大豆、紙の 2 種である。

◎掌の大きさ—中学生は成長期で、体格の差が著

表 1 質問内容とカテゴリー

属性	年齢
	性別
	(専攻)
…あなたの家族は次のどちらですか。	
1 両親と子供 (核家族)	2 両親と子供と両親の親 (世代家族)
…ご両親の年齢	
1 お父さん	2 お母さん
…あなたは兄弟姉妹の何番目ですか。	
1 第1子	2 第2子
3 第3子	4 第4子
…お母さんは仕事を持っていますか。	
1 持っている	2 持っていない
3	パートタイマー
箸の教育	
…箸の持ち方を教えられましたか。	
1 はい	2 いいえ
…箸の持ち方は誰に教えられましたか。	
1 両親	2 両親以外の肉親
3	その他
…初めて箸を持ったのは何才頃でしたか。	
1 3~6歳	2 6歳
3	覚えていない
…それは食事の度ごとでしたか。	
1 はい	2 いいえ
…食事をする時椅子, 畳どちらでしたか。	
1 椅子	2 畳
3	両方
…食事中ずっと正座ができますか。	
1 はい	2 いいえ
…食事の前にいただきますを言いますか。	
箸の使用	
…学校給食で箸を使いましたか。	
1 はい	2 いいえ
…あなたの効き手は右, 左のどちらですか。	
1 右	2 左
…効き手で箸を使いますか。	
1 はい	2 いいえ
…1日のうち, ご飯を食べる回数は。	
1 1回	2 2回
3	3回
箸の持ち方についての意識	
…箸を持ちにくいと感じたことがありますか。	
1 ない	2 ある
…箸の持ち方を直したいと思いませんか。	
1 はい	2 いいえ
…箸使いの作法を知っていますか。	
1 はい	2 いいえ

しいと考えられるので、箸の大きさと箸使いの作業能率の関連をみた。測定方法は以下のようである。

すなわち、被調査者の効き手の指を揃えて紙に押し付けさせ、手の平から中指の先までを掌の大きさとした。(他にもいくつかの測定法を検討したが、簡便性に欠け、フィールド調査としてはこの方法が最も再現性、簡便性に優れており採用した。)

◎箸使いによる指の移動距離の測定—箸の作業時に指の位置を移動して調節するものが見られるので、箸上の指の移動を測定した。

すなわち、調査者が箸の作業前後に被調査者の箸を持つ親指の先の位置を箸上に印し、指の移動距離とした。この測定も迅速性と簡便性が要求されるが、この方法は、再現性もよく採用した。

b) 箸に関するアンケート調査

アンケートの質問項目は、被調査者の属性として、年齢、性別、専攻、家族に関する項目(家族構成、両親の年齢、兄弟姉妹構成、母親の就労状況)および箸に関する項目(箸の教育、箸の使用、箸に関する意識等)についての15項目)で表1にその内容を示す。

4. 結 果

1) 箸の持ち方の分類、その機能性について

中学生360名、対照の大学生555名の箸の持ち方のタイプの分類結果を図1に示す。中学生全体のS1は46.7%、S2は53.3%で、大学生はそれぞれ50.6

%, 49.9%で、中学生はS2がS1を上回った。

男女の内訳では、女子S1 53.3%, S2 46.7%, , 男子S1 38.0%, S2 62.0%, 大学生女子S1 50%, S2 50%, 男子S1 51.3%, S2 48.7%で、中学生男子は女子よりS1の割合が低く、大学生男子に比較しても有意に低かった(5%水準)。

次に箸の持ち方の作業量の結果を表2に示し、その検定結果を表3に示す。

大豆の作業量は(いずれも平均値)、中学生全体では26.0個、大学生全体では24.4個で、中学生の作業量が有意に多かった(1%水準)。作業量の最高値は中学生は男女共S1の40個で、大学生はS1男子の45個であった。タイプ別の作業量は、女子S1 126.0個、S2 23.2個、男子S1 28.4個、S2 26.6個でいずれもS1の者の作業量が有意に多かった(女子1%水準、男子5%水準)男女の比較では、両タイプ共男子の作業量が有意に多かった(1%水準)。

同タイプの中学生と大学生を比較すると、女子ではS1 26.0個、大学生25.3個、S2 23.2個、大学生23.3個で有意差はなく、男子はS1 28.4個、大学生25.2個、S2 26.6個、大学生23.9個で両タイプ共中学生が有意に多かった(1%水準)。

紙の作業量は、試料の紙が薄く軽いため作業が困難であり、大豆の作業量の1/3近くに減少する。作業量は中学生全体で9.6枚、大学生12.6枚で、大学生が有意に多かった(1%水準)。最高値は中学生S2女子の26枚、大学生男子はS1の30枚であっ

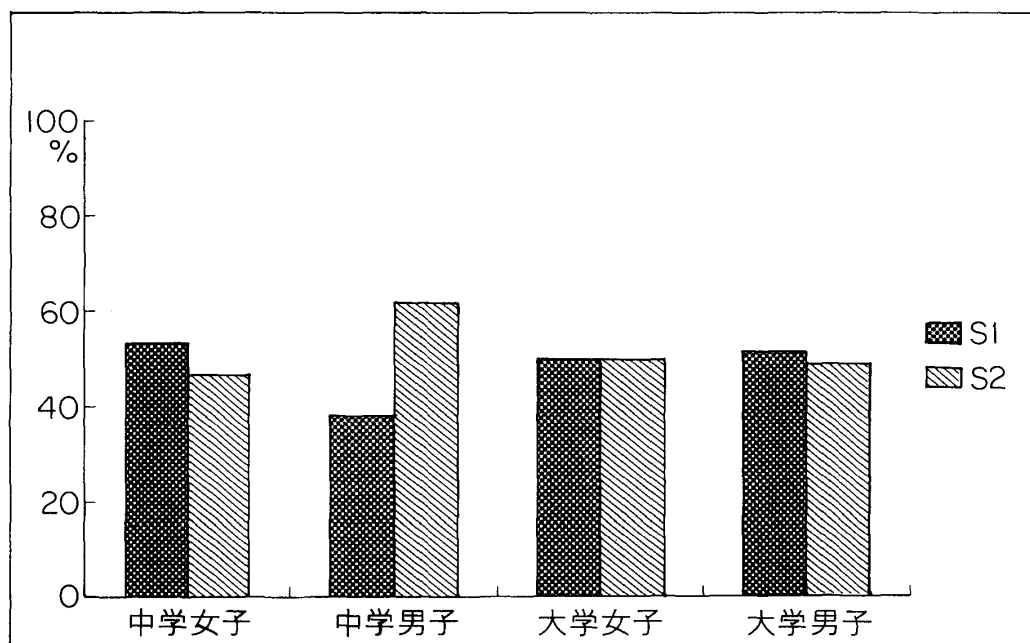


図1 箸の持ち方の分類

表2 箸の持ち方と作業量

		女 子				男 子			
		\bar{x}	SD	最高値	最低値	\bar{x}	SD	最高値	最低値
S1		26.0	5.22	40	12	28.4	5.01	40	16
S1		25.3	4.60	37	15	25.2	4.84	45	10
S2		23.2	4.45	35	11	26.6	5.34	37	9
S2		23.3	4.93	34	11	23.9	5.29	39	5
S1: S2 p<0.01					S1: S2 p<0.01				
					S1: S2 p<0.05 S1: S2 p<0.05 網かけ 大学生				

		女 子				男 子			
		\bar{x}	SD	最高値	最低値	\bar{x}	SD	最高値	最低値
S1		12.4	4.45	23	2	9.7	3.09	18	4
S1		13.2	4.23	23	3	15.0	4.39	30	7
S2		8.7	4.32	26	1	7.8	2.95	17	2
S2		10.8	4.40	29	2	11.6	4.33	26	2
S1: S2 p<0.01					S1: S2 p<0.01				
					S1: S2 p<0.05 S1: S2 p<0.01				

表3 作業量の検定

大豆				紙					
性別	中学生 (平均値)	検定	大学生 (平均値)	検定	性別	中学生 (平均値)	検定	大学生 (平均値)	検定
	26.0		24.4	p<0.01		9.6		12.6	p<0.01
女子	24.6	p<0.01			女子	10.5	p<0.01		
男子	27.5		女子	8.7					
女子	S1 26.0	p<0.01			女子	S1 12.4	p<0.01		
	S2 23.2		女子	S2 8.7					
男子	S1 28.4	p<0.05			男子	S1 9.7	p<0.05		
	S2 26.6		男子	S2 7.8					
女子	S1 26.0	p<0.01			女子	S1 12.4	p<0.01		
男子	S2 28.4		女子	S1 9.7					
女子	S2 23.2	p<0.01			女子	S2 8.7	NS		
男子	S2 26.6		男子	S2 7.8					
女子	S1 26.0		S1 25.3	NS	女子	S1 12.4		S1 13.2	NS
女子	S2 23.2		S2 23.3	NS	女子	S2 8.7		S2 10.8	p<0.01
男子	S1 28.4		S1 25.2	p<0.01	男子	S1 9.7		S1 15.0	p<0.01
男子	S2 26.6		S2 23.9	p<0.01	男子	S2 7.8		S2 11.6	p<0.01

た。作業量は女子 S1 12.4枚, S2 8.7枚, 男子 S1 9.7枚, S2 7.8枚で男女とも S1 の作業量が有意に多かった (女子 1%水準, 男子 5%水準)。

男女の比較では, 女子の作業量が多く, S1 には有意差が見られたが (1%水準), S2 では有意差は

なかった。中学生と大学生との比較では, 女子は, S1 12.4枚, 大学生13.2枚で有意差はなかったが, S2 では8.7枚, 大学生10枚で大学生の作業量が有意に多く (1%水準), 男子は S1 9.7枚, 大学生15.0枚, S2 では7.8枚, 大学生11.6枚で両タイプ共に大学生

表4 掌の大きさと身長

	身長(平均値 cm)	掌の大きさ(平均値 cm)
女子	153.8	16.7
男子	158.6	17.6

が有意に多かった。

次に中学生の掌の縦の測定結果をいずれも平均値で表4に示し、更に2つの試料間の作業量の相互関係を図2に、作業量と掌の大きさの関係を図3、図4に散布図として示した。

図2に示すように大豆と紙の作業量間には有意の相関が見られた。(1%水準)又、大豆、紙の作業量と掌の大きさの相互間には関係は見られなかった。

次に紙の作業時における、指の移動距離の測定結果を表5に示した。指の移動距離の最大値はS2男子の7cmであった。女子は平均値でS2 0.7cm, S2 1.0cm, 男子S1 0.9cm, S2 1.3cmで、男女共に指の移動距離はS2が大きかった。タイプ別の比較では、女子では有意差は見られなかったが、男子のS1, S2間には有意差が見られた。(1%水準)同タイプの男女の比較では、S1では有意差は見られな

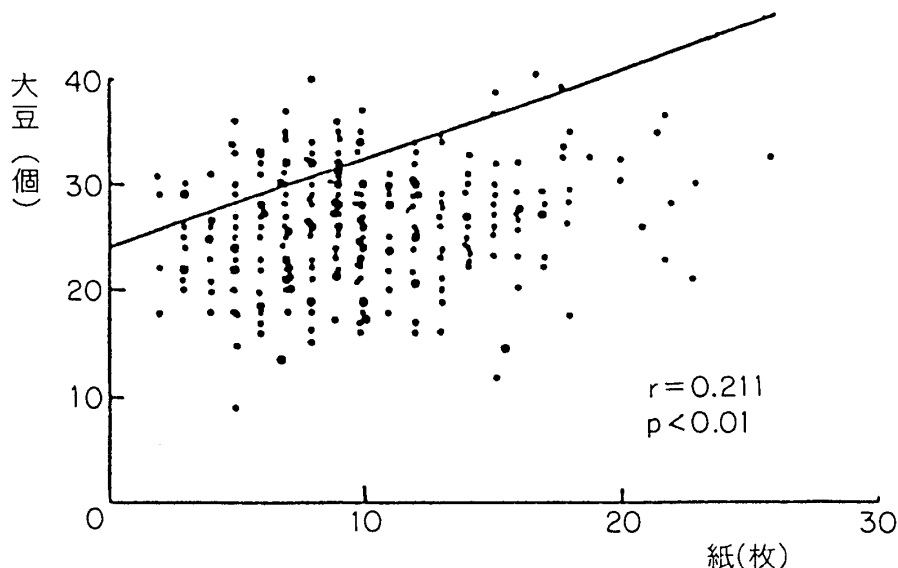


図2 大豆と紙の作業量

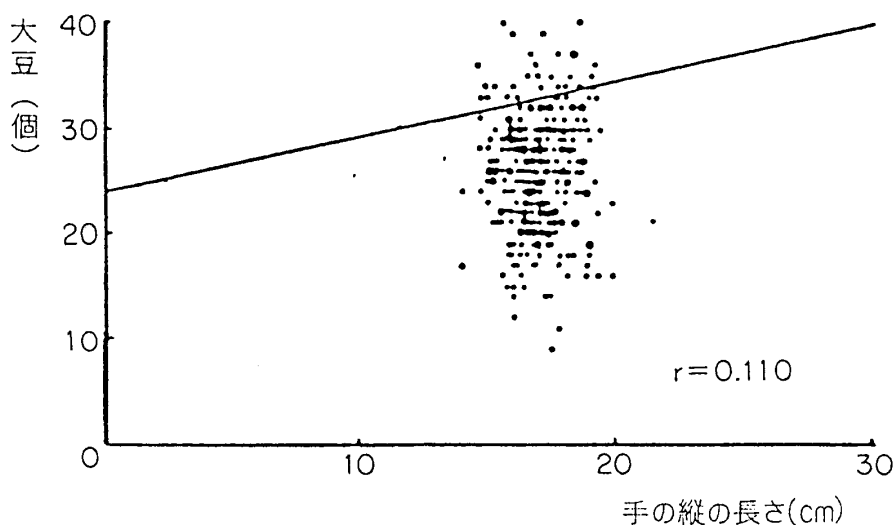


図3 掌の大きさと大豆の作業量

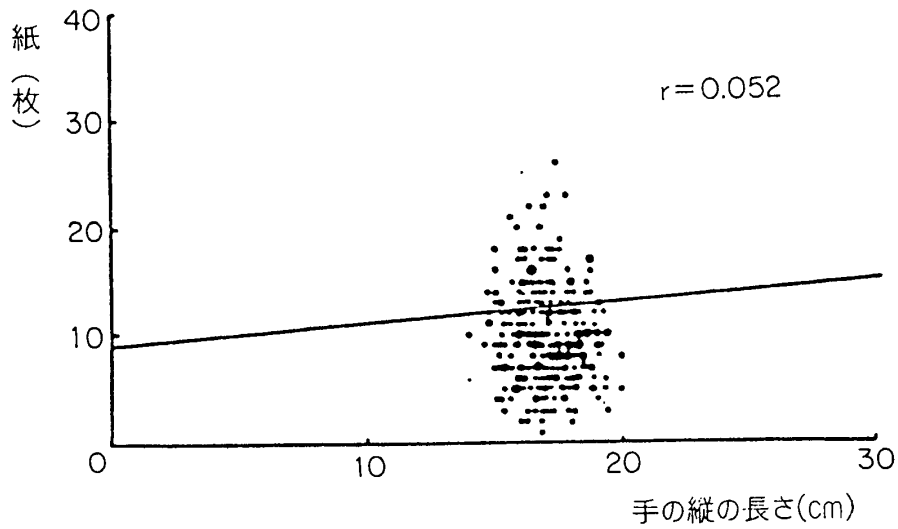


図4 掌の大きさと紙の作業量

表5 指の移動距離

	女子				男子			
	平均値 (cm)	標準偏差	最高値	最低値	平均値 (cm)	標準偏差	最高値	最低値
S1	0.7	0.86	4.8	0	0.8	0.91	6.2	0
S2	1.0	1.17	4.2	0	1.5	1.29	7.0	0

男子 S1: S2 $p < 0.01$

女子 S2: 男子 S2 $p < 0.05$

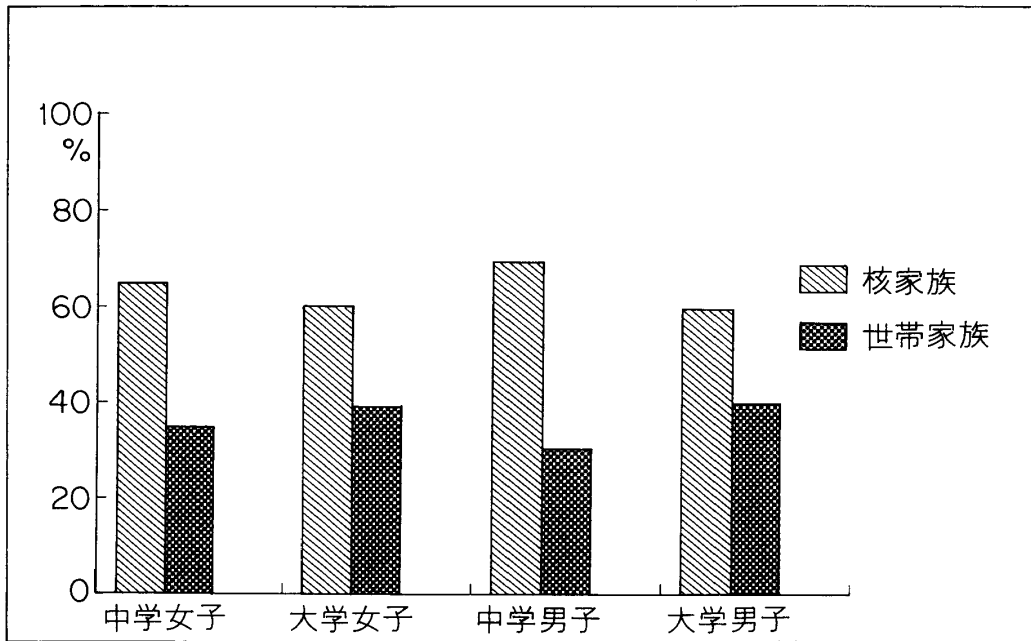


図5 家族構成

かったが、S2 では男子が有意に大きかった。(1% 水準)

2) 箸に関するアンケート調査

調査対象となった中学生(大学生)の‘家族構成’

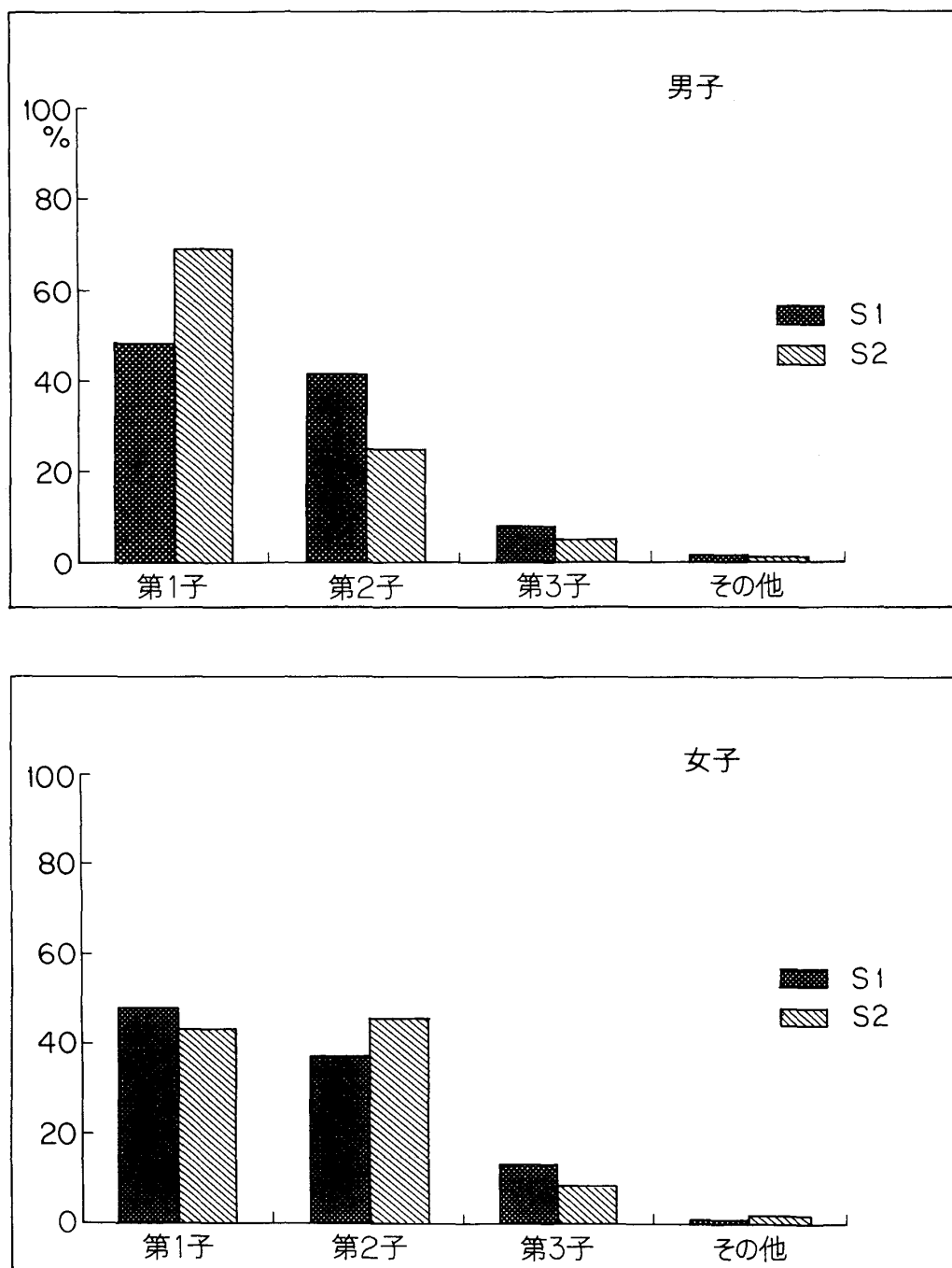


図6 兄弟姉妹構成

を図5, '兄弟姉妹構成'を図6, '両親の年齢', '母親の就労'についての結果を表6に示す。

'家族構成'は、中学生全体で'核家族'67.2%, '世代家族'32.8%で、大学生は60.1%, 39.9%で、この世代間では核家族化に大きな変化は見られなかった。

'兄弟姉妹構成'と家庭教育の関連について、女子では差が見られなかった。男子の'第1子'は'第2子'の約2倍で、'第1子' S1は48.3%, S2は68.8%, '第2子' S1 41.7%, S2 25%で第1子は S2が

多かった(5%水準)。

'母親の就労'が家庭教育に与える影響を見るべく、被調査者の6才以前、現在について質問した。男女共に6才以前、現在も'就労している'母親は40%前後で、6歳時より現在の方が約2%増加している。母親の就労と S1 S2 タイプの関連をみたが、男女間、タイプ間にも有意差はみられず、母親の就労が箸の持ち方の決定に関係するとは考えられなかった。

表6 S1, S2 グループの各質問条項に対する頻度

項目	カテゴリー	X ²				項目	カテゴリー	X ²				備考
		1	2	3	4			1	2	3	4	
*属性 両親の年齢	女子	43.2	40.2			食事の挨拶	女子 S1	78.3	21.7			肩かけ 大学生 * p<0.01 ** p<0.05
	男子	46.5	43.6				S2	79.6	20.4			
兄弟姉妹構成	女子 S1	48.0	37.6	13.6	1.0	男子 S1	82.0	18.0				
	S2	43.3	45.8	8.9	2.2		S2	69.7	30.3			
母親の就労 現在	女子 S1	46.2	53.8			*箸の使用 学校給食での箸の使用	女子 S1	81.0	19.0			* S1, S2 中央: 大女 * S1, S2 中央: 大男
	S2	34.4	65.6				S2	84.4	15.6			
6歳時	女子 S1	42.9	57.1			男子 S1	73.8	26.2				
	S2	34.4	65.6				S2	84.7	15.3			
*箸の教育 箸の持ち方を教えられたか	女子 S1	93.4	6.6			効果手	女子 S1	98.1	1.9			* S1, S2 中央: 大女 * S1, S2 中央: 大男
	S2	91.3	8.7				S2	97.8	2.2			
教育した人	男子 S1	83.9	16.1			男子 S1	95.2	4.8				
	S2	78.8	21.2				S2	84.7	15.3			
初めて箸を持った年齢	女子 S1	81.8	18.2			効果手で箸を使うか	女子 S1	98.1	1.9			
	S2	76.6	23.4				S2	97.8	2.2			
教育の頻度	男子 S1	85.5	14.5			男子 S1	95.2	4.8				
	S2	80.7	19.3				S2	87.9	12.1			
食事	女子 S1	78.4	21.6			*箸の持ち方についての意識 箸の持ち方をなおしたいか	女子 S1	41.5	58.5			* S1, S2 中央: 大女 * S1 中央: 大男 * S1 中央: 大男
	S2	67.4	32.6				S2	64.8	35.2			
正座	男子 S1	85.0	15.0			女子 S1	20.8	79.2			* S1 中央: S2 中央 * S1 中央: 大男 * S1 中央: 大女	
	S2	83.3	16.7				S2	41.9	58.1			
箸の作法を知っているか	女子 S1	72.7	27.3			男子 S1	32.3	67.7			* S1, S2 中央: 大女 * S1 中央: S2 中央 * S1 中央: 大男 * S1 中央: 大女	
	S2	70.2	29.8				S2	37.8	62.2			
箸の作法を知っているか	男子 S1	81.5	18.5			女子 S1	19.7	80.3			* S1, S2 中央: 大女 * S1 中央: 大男 * S1 中央: 大女	
	S2	87.9	12.1				S2	21.8	78.2			
箸の作法を知っているか	女子 S1	78.4	21.6			男子 S1	68.3	31.7			* S1 中央: 大男 * S2 中央: 大男	
	S2	67.4	32.6				S2	60.6	39.4			

a. 箸の教育に関する項目

‘箸の持ち方を教えられたか’では、女子の92.4%が‘教育された事がある’としており、男子の79.5%と比較して有意に多かった(1%水準)。男女とも両タイプに差はなかった。又男女間の比較では、S1の男女では差が見られなかったが、S2の男子に‘教育されていない者’が23.2%あり、女子S2 8.7%と有意に差が見られた(1%水準)。中学生と大学生の比較では、S1女子で‘教育されなかった’者は、大学生27.3%で中学生の4倍、S2では5倍であり、両タイプとも有意に差が見られた。(1%水準)男子でも‘教育されなかった者’は、S1の大学生が35.1%で、中学生の2倍であり、有意に差が見られた(1%水準)。

‘箸の持ち方を教育した人’は、‘両親’が75%以上で、‘その他の肉親’の約5倍を占めた。当該中学生は大学生より、米飯給食による学校給食での箸の指導を多く受けていることから、箸の指導をした人が‘その他’と答える者の増加を期待したが、中学生と大学生に差は見られなかった。

‘初めて箸を持った時期’は、女子は‘6歳以下’の者が50.3%、‘6歳以上’の者が18.4%、男子は‘6歳以下’が51.1%、‘6歳以上’が21.0%でいずれも‘6歳以下’で教育を受けた者が2倍以上であったが、男女差は見られなかった。タイプ別では女子、男子共にS1、S2間に有意差はみられず、タイプの決定に影響を与えているとは考えられなかった。大学生との比較では、S1女子は‘6歳以上’13.8%、大学生36.7%、S1男子も‘6歳以上’は23.1%、大学生43.7%でいずれも有意に差が見られた(1%水準)。S2の女子は、‘6歳以下’48.2%、大学生56.5%、‘6歳以上’24.1%、大学生31.8%と差が見られ(5%水準)、男子でも‘6歳以上’の者が19.8%、大学生41.3%と有意差がみられた(1%水準)。

‘教育の頻度’は、中学生男女では‘食事の度ごと’の者が女子71.5%、男子65.4%で、全体で68.5%であり、‘食事の度ごとでない’者の2倍以上であったが、男女間、女子S1、S2間、男子S1、S2間に有意差は見られなかった。大学生との比較では女子のS1、S2間、男子のS1、S2間のいずれにも差が見られ(女子S1 S2男子S2 1%、S1 5%水準)、中学生は両親から食事の度ごとに注意を受けている者が多く、大学生との差が見られた。

‘食事の間正座が出来るか’は、女子58.6%、男子63.5%が‘出来る’と答えているが、女子S1 S2間、男女間に有意差は見られなかった。大学生との

比較では、女子では、S1 S2間に有意差は見られなかったが、男子の場合、S1では、‘正座が出来る’者は58.3%、大学生は36.6%、S2は、66.7%、大学生51.6%で両タイプ共大学生に正座が出来ない者が多い。(S1 1%水準、S2 5%水準)。

‘食前食後の挨拶をするか’は、女子の78.9%、男子の74.4%が‘挨拶をする’と答えている。大学生との比較では、大学生のS1女子を除いては、大学生は‘挨拶をしない’という者の方が多く、中学生と有意に差が見られた(1%水準)。

b. 箸の使用に関する項目

‘学校給食での箸の使用’は、女子2.7%、男子80.5%が‘使用した’と答えたが、男女間では、有意差はみられず、S1 S2間にも有意差は見られなかった。

大学生との比較では、大学生S1女子44%、男子30.5%、S2女子40%、男子32.5%で、箸を‘使ったことがない’者が50%以上を占め、当然の事ながら米飯給食実施状況との関連を示している。

‘効き手は左右のどちらか’は、女子97.5%、男子94.8%の者が‘右利き’と答え男女差はなく、女子S1 98.1%、S2 96.8%、男子S1 95.2%、S2 94.7%が‘右利き’で、若干男子の方が女子2.5%に対し5.2%と‘左利き’が多かったが、有意差ではなかった。大学生も90%以上の者が右利きであったが、女子5.4%、男子6.3%と中学生より‘左利き’が多かったが有意の差ではなかった。

又、中学生、大学生のいずれも有意差はないが、S2に‘左利き’が多かった。

‘利き手で箸を使うか’では、女子97.9%、男子96.8%が、‘利き手で箸を使う’と答えた。しかし、‘左利きで箸は右で持っている’者は女子S2に左利きの68%、男子S2に左利きの40%いた。大学生では、有意の差ではないが、S1女子81%、S2 82%、S1男子72%、S2 76.7%であった。

‘一日にお米を食べる回数’については、男女共一日2回の者が最も多く、(女子59.1%、男子52.8%)、一日3回と答えた者と両方を併せると90%以上であった。一日に1回と答えた者は、S1女子4.7%、S2 12.9%、S1男子4.8%、S2 11.1%であり、男女共S2が多く、有意の差が見られた(5%水準)。大学生との比較では、大学生は男女の両タイプ共一日1回と答える者が中学生より多く、なかでもS1女子では1回の者は、中学生4.7%、大学生19.5%で有意に差が見られた。(1%水準)

c. 箸に対する意識

‘箸を持ちにくいと感じるか’については、‘持ち

表7 数量化2類による分析結果

					ケース得点の外的基準別平均値と標準偏差				
女子					女子				
項目	カテゴリー	ウェイト	レンジ	偏相関係数	スタイル	\bar{x}	SD	正判別率 (%)	相関比
初めて箸を持った年齢	1. 6歳以下	0.27		0.12	S1	0.5	0.78	73/106 (68.9)	0.29
	2. 6歳以上	-0.84	0.22		S2	-0.6	0.91	68/ 93 (73.1)	
	3. 不明	0.10			全体			141/191 (70.8)	
母親の就労	1. している	0.41		0.12					
	2. していない	-0.25	0.66						
一日に米を食べる回数	1. 2—3回	0.34		0.11					
	2. 1回	-0.18	0.52						
	3. 不明	0.09							
男子					男子				
一日に米を食べる回数	1. 2—3回	-0.36		0.13	S1	0.6	0.84	48/ 93 (76.2)	0.20
	2. 1回	0.29	1.80		S2	-0.4	0.92	73/ 99 (73.7)	
	3. 不明	-1.50			全体			121/162 (74.7)	
食前食後の挨拶	1. する	0.15		0.12					
	2. しない	-0.45	0.61						
箸の作法を知っているか	1. 知っている	0.13		0.11					
	2. 知らない	-0.17	0.41						

にくいと感じる’者は女子30.7%,男子20.8%で,‘持ちやすい’と言う者の1/3で,S1での男女差は見られなかったが,S2では,女子の‘持ちにくい’者が41.9%で男子の2倍であり,有意差が見られた。(1%水準)タイプ別では,女子のS2に‘持ちにくい’者が有意に多かった。(1%水準)

大学生との比較では,S2女子では,大学生の60.7%が‘持ちにくい’と答えており,中学生41.9%と差が見られた。(5%水準)男子はS2の大学生41.3%が‘持ちにくい’と答えており,中学生の2倍で,有意の差が見られた。(1%水準)

‘箸の持ち方を直したいか’は‘直したい’者は女子47.7%,男子35.6%で,女子は‘直したい’と思う者が有意に多かった(5%水準)。タイプ別では女子S1S2間,男子S1S2間に有意差は見られなかった。大学生との比較では,‘直したい’者が女子S141.5%,大学生79.2%で大学生に多く,S2も中学生54.8%,大学生75.8%で,いずれも有意差がみられた(1%水準)。

‘箸の作法を知っているか’では,男女共‘知っている’者の方が多く,女子では77%,男子71.3%が‘知っている’と答え,S1の男女間,S2の男女間では有意差が見られた(5%水準)。大学生との比較では,大学生はS1女子90%,S283.3%,S1男子71.8%,S271%と中学生より‘知っている’者が多かったが,有意差は見られなかった。

d. 数量化2類による分析

表7は,質問事項の中で箸の教育に関する8項目(属性のうち,特に家庭教育と関係する項目—母の就労を含む),箸の使用状況に関する4項目,箸の意識に関する3項目の15項目を説明変数とし,箸の持ち方S1,S2を目的変数(外的基準)とし,数量化2類による分析の結果を示した。(この際カテゴリーの中で回答数の少ないもの,類似しているものは1つのカテゴリーとしてまとめた。)相関比は女子0.29,男子0.20であり,高い値は得られなかった。正判別率は,女子S168.9%,S273.1%,男子S176.2%,S273.7%であった。男女のS1グループとS2グループの決定に寄与する要因,各レンジ及偏相関係数の大きい上位3つは,女子は‘初めて箸を持った時期’が‘6歳以上である’がS2グループに判別され,‘一日に米を食べる回数’の‘一日に2回以上’がS1グループに判別された。

男子は,‘一日に米を食べる回数’が‘不明’,‘食事の挨拶’を‘しない’,‘箸の作法を知っているか’の‘知らない’がS2グループに判別された。

5. 考 察

中学生の箸の持ち方は,男女全体ではS2がS1を上回り,特に男子では,62%がS2であった。これは,両タイプがほぼ同数である大学生の分布と相違が見られた。男子にS2が多いのは,本調査の結果でも示されるように,家庭で箸の持ち方の教育も女子よりも緩やかで,S2は,明らかに教育を受けていない者で構成されていると考えられる。これは,男子は女子より食欲が旺盛で,食事の意義が空腹を満たすだけにあるように考えられる。大学生になると男子でも箸の持ち方を直したい者や,箸の作法を知っている者が増加するのが,中学生男子は食事作法については関心が薄く,家庭でも女子より放任する傾向があるように思われる。

箸の持ち方と機能性については,今回の調査でS1が明確に機能的に優れていると結論づけられる。しかし,中学生男子はS2が多いにもかかわらず,大豆の作業量が他の3者(中学生女子,大学生男女)より多かったが,これは調査時に男子は友人と競争する者が多く,まだ子供っぽさの抜けきらない中学生の一面を示している。又,大豆の場合は作業がしやすいため,反射神経の良い者は作業量が増加したためと考えられる。しかし,困難な紙の作業量は他の3者より低く,箸を持つ手の移動距離も大きかった。

箸の持ち方に関する教育では,教育を受けた経験,頻度共に中学生の方が多く,家庭のしつけの不在が喧伝される昨今^{9,10)},本調査の両親の40歳台(団塊の世代前後)の世代を考えると意外な結果であった。これは,中学生は現在両親と同居しているため,食事の度に,注意を受ける年代にあることが理由として考えられる。大学生では,記憶で答えているためか,世代差によるものかについては,明確ではなかった。

米飯給食の普及率の高い環境で育った中学生は,学校給食での箸の使用は80%以上であったが,‘箸の教育をした人’が‘両親以外’の人と答えた者は大学生と変わらず,学校給食の教育効果は期待出来なかった。

しかし,神谷は,学校給食の嗜好における教育効果は多大なものがあり,給食の献立は,児童期はもとより,成人後も嗜好に影響を与えているとしている¹¹⁾。米飯給食の多かった中学生にS2の者が多かった事は,箸の教育が人間の欲求に直接的な嗜好好程に影響を与えなかったのか,柳沢の指摘するほどに,学校給食が学校教育の一環として,十分な位置づけが為されていない事に起因しているためだっ

たかは結論づけられなかった¹²⁾。

大学生の中に左利きでありながら、箸は右手で持って矯正している者が増加する傾向が見られることは、橋本らの指摘するように、加令とともに、箸の持ち方が他人とのかかわりの中で固定していくことを示している。

又、数量化2類による分析での箸の持ち方の決定因子は、前報の女子大生の場合より、男女共に、生活習慣の因子が強く影響していると考えられた。

この稿を終わるに当たり、この調査に関して多大なるご協力をいただきました大谷中学校、東山中学校、立命館中学校、京都女子中学校、ならびに京都大学、京都女子大学、同短期大学部、京都府立医科大学、龍谷大学の生徒、学生の皆様方、ならびに教職員の皆様方にたいし、厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 坂田由紀子：家政誌，41，637-645 (1990)
- 2) 向井由紀子，橋本慶子：家政誌，29，467-473 (1978)
- 3) 小沢和郎：学校の食事，2，15-18 (1983)
- 4) 橋本勝嗣：食料管理月報，43，25-31 (1991)
- 5) 塩見邦邑雄，吉野 要：中学，高校生の心理と指導，18-19 (1990)
- 6) 詫間武敏，安香 広：中学生の心理，6-14 (1980)
- 7) 関 順一，返田 健：大学生の心理，26-82 (1983)
- 8) 向井由紀子，橋本慶子：家政誌，34，269-275 (1983)
- 9) 新掘道也：教育と医学，36，11-18 (1988)
- 10) 紫野昌山：青少年問題，34，4-12 (1987)
- 11) 神谷一博：食の科学，130，5-12 (1988)
- 12) 柳沢文徳：労働経済旬報，39，5-13 (1985)